

存在、状況そして探検

八 木 秀 樹

機械文明の巨大なメカニズムの中に個としての人間は、単なる一部品としてはめこまれて、メカニズムの動きにただ一途に順応することによってしか生きることができなくなっている。個としての人間は、今日では平均化された大衆の一員として集団のなかに埋没しており、個性も創意も失なって、誰とでも取りかえる一単位と化してしまっている。

また、インテリすらも定型化されたイデオロギーに基づき概念的思考による平均化された世界観しか持ちえなくなっている。そういったテクノロジー時代の社会的状況及び情報化された知識の氾濫によって、反比例して、我々は何かを失っている。

「諸事物や、諸現象を統合的に把握する力を失い、それらの断片の太平洋のうえで盲目的に漂流するほかなくなっている。これは、なにも体制うんぬん以前のテクノロジー時代の必然的な社会状況と言えるであろう。」そういった社会状況の中にあって知性とか理性といったものが、いかなる意味を持つことができるのであろうか。

私は時々探検の分類方法として、知的探検とか、情的探検とか、意志的探検といったような言葉を使う。知的探検とは、知ることを前面に押し出した探検であり、いわゆる学術探検である。所詮そういう探検のあり方は、机上の延長でしかありえないし、我々のいうところの概念の探検ではないと思う。前の方で書いた社会状況を踏まえるな

らば、なおさらであろう。しかし、学術探検といってもやっている本人は、知性に基づいて行動しているのだけれども、自らの行動の過程の中で、世界をとらえようとしているだけだから、いちがいに排することはできない、情的探検とは、感情とか風情を重視した探検のあり方である。こういった探検のあり方というものは、サークルといった形体で探検像を求めようとしているのだからサークルの前面に出てこないし、また、そういう活動は、個人でやればよいことである。次に意志的探検として、「そこに山があるからだ。」という有名な言葉に代表されるように、自分にとって未知なるものを行動として意志的に求め、自己の全存在を、その行為の中に投企し今ある自己をたえず否定していく探検のやり方である。

とにかく、アクティブに世界像を自らの膚を通じて求めようとする行為が、探検であると思うし、また、社会的状況として、今まさに求められているのは、そういった活動を文化の中に還元するというのではないだろうか。（工学部3回生）

参考文献

「非しき熱帯」レヴィ・ストロース 著

